広告特集

企画　制作・朝日新聞社広告局

1999

紙上シンポジウム

海は人類を救えるか

大好きな海

福島県　丸山陽馬（十一歳・小学生）

ぼくは、海が大好きです。その理由は、第一に、ぼくは、海でつりをすることが好きだからです。第二の理由は、おじさんに、ヨットに乗せてもらった時、波や海の色を見ると、気持ちが良いからです。第三に、ぼくは、貝、いか、たこ、えび、まぐろ、フカヒレなどが大好物だからです。第四に、夏、泳ぐと熱かった体が、海の水でひんやりして、とても気持ちが良いからです。

以前、タンカーから石油が流れた時、みんなで石油をとったので、海とも仲良くできると思います。しかし、海に行くとわかりますが、空き缶、ビン、ビニールぶくろなど、たくさんのごみが落ちています。だから、カメは、クラゲなどとまちがえて、ビニールを食べて、死んでしまうことがあります。ですから、ごみが捨ててあったら、海のため、海に住む生き物のために拾いたいと思っています。

生命を誕生させ、
育み、浄化する海。
我々のいのちの故郷である
その海が、
いま困難な状況に
置かれています。
人間の未来において
未知の可能性を
無限に秘めた海と、
人々の営みについて、
様々な立場のみなさんに
紙上で意見を交わして
いただきます。

未知と有限

東京都　角田智彦（二十四歳・会社員）

「海はA４の紙だ」ある教授の言葉が印象に残っている。平均でおよそ四千㍍の深さである。富士山と比較する人もいる。しかし、A４の紙に世界地図を書くとその深さは約〇・〇三㍉、紙の厚さ程度にしかならない。海は有限の世界なのだ。また、海は未知の世界でもある。特に深海の水の循環や生態系はほとんど知られていない。人間がたどり着けないから、深海ははるか無限に遠くあるように錯覚する。

未知だから何をしてもいいという考えは、その影響が自分にフィードバックしないという勘違いから生じているように思える。しかし実はその逆で、未知だからこそ慎重に取り扱わないといけない。しかもそれが有限の世界ならばなおさらである。

自分たちが出した「ごみ」を深海に持っていくという考えを多方面で聞くが、そうした行動には慎重になってもらいたい。また、メタンハイドレートの開発についても同様である。

海の贈り物

茨城県　篠崎祥子（六十歳・主婦）

息子はインドネシア国のフロレンス島から三・五㌔離れた小島で、真珠の養殖の仕事をしています。生まれて間もないころから、毎年夏には家族で海に出かけ海水に親しんでおりました。成長するにつれ、だれよりも海が好きになり、何とか海と一緒に暮らせる仕事に就きたいと脱サラをしました。三重の養殖場で三年間修業をし、一人遠くへ渡っていきました。その仕事場に今年二月私たち夫婦が訪ね、いろいろ貴重な体験をしてきました。現地の従業員と早朝より日が沈むまで、小さい舟で海に出て貝を洗います。その海は見たこともない美しい色と広さで、しかも汚れていません。それらを見た時、やはり海を美しく保つのは人間であり、それを守れば、海は私たちにすばらしい贈り物をしてくれるのだと思いました。直接海に携わる仕事をしていない人も、美しい海を保つために一人ひとりが海を汚さないよう心掛ければ、日本の海ももっと美しくなることでしょう。

海は人類を救えるか

大阪府　森本真梅（十五歳・高校生）

私は海が大好きです。まったく絶えることのない波の打ち方、地図でしか知らない海の大きさ、決して人工的には再現できないような透き通った真っ青な色……。規則性のない波を見ていると、心が広くなるような気がします。毎日毎日、時間に追われながら、自分の心の中もふり返れないような忙しい日常の雑念から解放された気分になります。今までつまらないことで怒り、泣いていた自分がとても小さく小さく感じると同時に、こんなに広い自分の知らない世界があったことに驚きました。

海は、私たちが日常の生活で失っていたり、忘れかけたりしているものを思い出させてくれます。私は、海には神秘的な不思議な力があると思います。海は、人の心を大きく、和やかに、リラックスさせてくれると私は思います。だから、海は人類を救うどころか、なくてはならない存在なのです。

句心も海より

兵庫県　斉藤和子（五十六歳・主婦）

海は何より希望をもたらします。明るい未来、広い世界、はるかなる水平線の向こうに限りない興味をもたせてくれます。はだしで歩ける砂浜、泳げる海は楽しさと思い出を育んでくれます。魚貝、海藻など食卓への恵みも受けられます。水や塩、オゾンなど身近なものから、交通手段としての海路は世界中からの物資を運んでくれます。

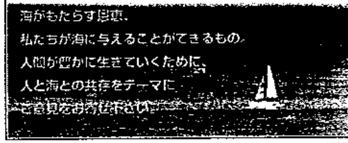
私たちが海に与えることができるものは、できるだけきれいな水でお返しするということが第一です。ごみのない美しい川、ごみのないきれいな浜辺など、私たちにできることは沢山あります。平素、忘れがちなことですが、紙上シンポジウムの紙面から皆の意見を知ることも大切なことです。

黒潮の宿で目覚めて朝時雨
イルカ泳ぐ海に向かふや若葉風
昼網の鮊子すぐに大鍋へ
城崎の灰色の海春の雪

ご意見を募集します

紙上シンポジウム「海は人類を救えるか」

6月中旬から1カ月間、5回の紙面で、皆様のご意見を紹介します。



海がもたらす恩恵、
私たちが海に与えることができるもの、
人間が豊かに生きていくために、
人と海との共存をテーマに
ご意見をお寄せ下さい。

お寄せいただいたご意見の中から紙面で紹介する20編前後には、お名前、年齢、居住地域（東京都など）、職業を記載します。採用分には2千円の図書券を差し上げます。封書でご意見を400字におまとめになり、住所、氏名、年齢、職業、電話番号を記して下記へお送りください。
第3回の締め切りは6月24日の消印まで有効です。
あて先　〒104-8665 東京京橋局私書箱303 朝日新聞社広告局
「紙上シンポジウム　海は人類を救えるか」係

国際海洋シンポジウム’98

IOS’98　International Ocean Symposium

海は人類を救えるか
The Ocean, Can She Save Us?

平成10年7月28日（火）・29日（水）東京国際展示場「東京ビッグサイト」国際会議場

●記念講演　D・ジェームス・ベーカー（NOAA〈アメリカ海洋大気局〉長官）　ピーター・ベルウッド（オーストラリア国立大学教授）
●基調講演　栗林忠男（慶應義塾大学教授）　[illegible]
●パネルディスカッション
野中ともよ（ジャーナリスト）　[illegible]（日本科学技術ジャーナリスト会議事務局長）　石原義剛（海の博物館館長）
[illegible]（東京水産大学教授）　[illegible]（武蔵野美術大学助教授）　[illegible]　C・W・ニコル（作家）
[illegible]（日本郵船株式会社「飛鳥」船長）　E・E・ミトロポウロス（IMO〈国際海事機関〉海上安全部長）
[illegible]
●参加費　[illegible] 2,000円 [illegible] 3,000円　学生 1,000円 [illegible]

日本財団